



# ハンザ貿易都市リユベックの都市機能配置

藤岡, ひろ子

---

(Citation)

兵庫地理, 35:32-42

(Issue Date)

1990-03

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90002368>



# ハンザ貿易都市リューベックの都市機能配置

藤 岡 ひろ子

## はじめに

世界の主要な港湾都市では、遠隔からの渡航者が来訪するとともに、商業活動を目的に、そこに複数の民族が居住と交易の特権を得て定住し、各様式の生活地域と貿易機能地域を形成した例が少ない。

筆者は、このような港湾都市の事例として、横浜<sup>1)</sup>・神戸<sup>2)</sup>・長崎<sup>3)</sup>などでは「外国人居留地」を中心とした角度から、上海<sup>4)</sup>では旧市と新市の形成過程と、西欧的な貿易機能地域の分析をおこなった。

多くの移民を導入した港市、リバプール<sup>5)</sup>では、都市構造の変化と現在の衰退現象について論じた。次に中世北方貿易開発のため、ドイツ人が長期にわたって居住したバルト海域、ノルウェー海岸に形成されたハンザの貿易業務の地区<sup>6)</sup>について検討した。その結果、もっとも多く北方に商人を輩出し、一時期、ハンザ貿易をリードしたリューベックの都市機能の配置に関心をいだくようになった。

この小論は以上のような研究の一環として報告するものである。

リューベックは、中世北方貿易の重要な拠点であり、12世紀に秀れた地形条件の下に整然とした貿易機能都市の都市プランをつくり上げている。

市は、ハンザ同盟の盟主都市として、四大商館（ノヴゴロド・ヴィスビー・ロンドン・ブルージュ）を配置し、ヨーロッパ大陸各地の商業都市の貿易システムの核心的な機能を持ちつづけた。

リューベックの都市機能の配置は、中世のキリスト教社会を反映し、いたるところに教会の立地が目立つ。この教会が、貿易都市の全体構造の中で極めて重要な立地要因を持っていることに注目しなければならない。

筆者は1989年夏、この地を訪れたが、現在のリューベックの商業はもはや中世の継続ではない。港湾都市の中核は、リューベックからハンブルクに移動し、リューベックは歴史的な文化都市として、「ちがった時代のちがった文明の香りをかぐ

ために、人々がやって来る」<sup>7)</sup>町となった。

1942年この町は第二次大戦の戦禍により市の中心部を破壊された。その後、市は工業化・近代化の道を避け、戦災復興と中世ハンザ都市の復元に全力を注いだ。その結果1987年、ユネスコによって「国際的文化都市」として認証されるにいたった。この小論では、12世紀頃から17世紀頃に来るまで、ヨーロッパ最大の都市連合体の盟主都市であったリューベックの都市形成基盤と、都市の内部機能の配置を探り、北方ハンザ居留地の内部機能配置との関係を確認することを目的とする。

## 1. ハンザ都市、リューベックの成立と発展基盤

### 1) 建設都市リューベック

12世紀の半ば頃は、ドイツの移民たちが、現在のリューベックを含む所謂東方の未開発地の開拓に、力を注いだ時代であった。その主体は各封建領主連である場合が多かった。

この頃を中心にヨーロッパでは、急激に都市とよばれ、農村とは区別される商業の拠点が増加した。中には少数の自然発生的な都市もあったが、領主による「建設都市」<sup>8)</sup>が数多く生まれた。それらの建設都市は、ドイツの東方や、バルト海の沿岸にも広がるようになった。現在の西ドイツ北東部は、スラヴ民族の居住地であり、まだ集落の連続性がなかったが、西方の都市から遍歴商人が陸上の道をたどって、領主の館や、既にキリスト教の聖堂の配置されたところに拠点を見出していた<sup>9)</sup>。遠隔地への遍歴商人のひらいた市場の取引や施設の形態は、ライン川とエルベ川の間市場集落と類似していたといわれる。

こうした遍歴商人の交通路のゆるやかな拡大と、キリスト教布教とは相互補完の関係を保ちつつ、開発が進行するとともに遍歴商人の行動の拠点が、次第に都市的集落にと成長した。また、商人の行動を媒介として、西ヨーロッパと北方諸都市との間の新しい法に基づく交易の成立が、必然的

に要求されるようになった。その時期は、ヴァイキング活動が終熄した12世紀に入ってからであった。

ヨーロッパ東方・北方の未開地にキリスト教が普及し、交易が促されると、もはや遍歴商人の時代は過ぎ去り、商人の組織的なグループ、次には都市の組織による交易の時代が到来した。リューベックも、その時流にのって建設された町のひとつであった。

リューベック都市の成立は、この北方交易と強い関連性がある。直接のきっかけは、北方漁場で必要な塩干処理用の塩をスカンジナビア南部に送ることにより、交易を拡大することからはまっている。

市の創設は1143年、二つの川の間形成された砂州状のまとまりある地域が、ホルシュタイン公、アドルフ二世<sup>10)</sup>によって選定され、商業都市の建設がはじまった。しかし、初期の町はせっかくの移民の集中にもかかわらず、大火によって消失した。その後既に広域に権勢をもったハインリッヒ・デア・レーヴェ（ハインリッヒ獅子公<sup>11)</sup>）にこの町の支配権がゆずられ、1180年頃には新しいリューベックの町の主要な機能の配置、道路のレイアウトが完成した。この町は、ヨーロッパ東方の建設都市の典型であった。

1968年、リューベックの古い中心部の考古学的調査<sup>12)</sup>が実施されたが、その結果、現在のマーケット付近からは小さい壺類が、またその周辺からはおそらく、12世紀後半から13世紀のものとおもわれる木製の壺やグラス、靴、皮の一部、キリ、パンチ、短刀などの種々の道具、ダイス、ビーズ、櫛など、多数が、廃棄場と思われるところから出土している。また河下の一部で、スラヴ民族の遺物と思われるものも発見されている。現在のリューベックを含む西ドイツ北東部は、ヴェンデ族といわれるスラヴ系民族が居住していた不毛に近い土地であった。現在の核心地に近いところは、リューベックの中でもやや高い丘の部分に当たり、川に近い排水の良好なところに初期から人々が居住したものと推定される。

リューベックを創設したアドルフ二世が、この地で集落を成長させるためには、人口が不足していたので、移民を求めて商業の育成を願っていた。その為には既に開発の進んだ西ヨーロッパ、ラインランド、ウェストファリア周辺へと使者を送り、

「人を集めて建設都市」の第一歩を開いた。

## 2) ハンザの盟主都市

リューベックの都市機能の配置を調べる前提として、この都市が中世の時代にヨーロッパの100にも及ぶ都市との連合によって発展し、しかもその都市連合体の盟主の地位をもった都市であることを確認する必要がある。リューベックの都市は、最初から商業の町を目標に建設されたものであり、その機能の配置も、その趣旨に沿って計画されたものであった。

12世紀頃から17世紀頃まで発展したハンザ貿易は、主として北方のバルト海地域、スカンジナビア、ロシア産の生産物である魚類、毛皮、木材、ワックス、石材、鉱物、蜜、バターなどの日用品を輸入し、ヨーロッパ各地産の塩、穀物、ビール、ホップ、繊維類などを輸出する交易であった。リューベックは、市自体に生産力があるわけではなかったで、仲継貿易の役割を果たすようになった。各地の需要に応じ、大量の商品を、海路、陸路を経て流通させることは、少数の商人・特定の都市の力では実現不可能であった。北方はヴァイキング時代の古い慣習がなお残っており、スラヴの住む東方地域にも、異教に対する著しい抵抗のある時代の背景があった。冬のきびしいバルト海の自然条件の克服や、西ヨーロッパと共通の文化の基盤を築き上げるための布教への協力などの難題の中で、リューベックは建設都市群と連繫し、各地におこった都市同盟とならんで、「ドイツ・ハンザ(Deutsche Hanse)」という最大のリーグを形成するにいたった。エディート・エネン<sup>13)</sup>がこのリーグが、ドイツ人に有利な方向に赴いた理由として、①ドイツ人の東方進出、②西洋の法をもった都市リューベックの建設、③造船の分野の技術革新、の三つを上げている。

ハンザは歴史家達によって、前ハンザの時代、即ち商人団体が中心となって北方貿易を推進した商人ハンザ時代と、都市の連合体が交易を推進するようになった都市ハンザの時代とに分けられている。前者の時代は12世紀から13世紀末までくらいであり、ロシア、バルト海各都市の交易にイニシアティブをとったのは、現在のデンマーク領のバルト海の島、ゴートランドの商人達であった。リューベックのハインリッヒ獅子王はその事情を察知し、1161年にこの島の港ヴィスビーを

仲継地として、交易を成功させるために、ゴートランド、リューベック間の相互の通商体制を平和的に推進させている<sup>14)</sup>。

しかし次の段階では、1298年には、ゴートランドの地位をリューベックに置きかえるような体制づくりに転じ、諸都市の同意を得て、都市連合による交易組織 — 即ち都市ハンザ体系を出発させた。しかしリューベックは一挙に、100余の都市同盟の盟主となったわけではなく、徐々に、ハンザ諸都市の中で主導的な役割をもち、その同盟都市は西ヨーロッパの主要な交易の町を網羅するようになった。

14世紀には少なくともリューベックは富裕な商人が市参事会を構成し、司教や王の権力を排除し、交易業務に純化した貿易機能都市となった。ハンザの都市の代表者たちがここで会議をもち、また在外商館の出先から集まる情報によって、商業の機能に活力を増強させることの出来る核心地であった。

しかし各都市のすべてがリューベックの指導力に賛同するわけではなく、各時代により、都市間に交易上のトラブルは絶え間がなかった。リューベックは13世紀から15世紀までの間、北部ドイツでは最大の都市となった。1300年には10,000人、15世紀には25,000人に達した<sup>15)</sup>。

1259年までにリューベック市民の出身者の約60%を占めたのは、ライン地方とライン下流のヴェストファーレン、ニーダーザクセンであり、東部ドイツ出身は、わずかに3%であった<sup>16)</sup>。リューベックの都市の多くは、西方から集められた人々であった。リューベックの都市機能配置が、西方の影響が強いことはいふまでもない。

### 3) リューベックの位置、環境の有利性

中世ヨーロッパを、ローマ帝国の威勢の下に組み入れられた西方と、そうでない東方とに区分するならば、12世紀初めのリューベックは、明らかに地中海文化の豊かさから程遠い東方に属する町であった。この未開な地域に町が建設されるに当たり、偉大な指導者のアドルフやハインリッヒ獅子公の力によるとはいえ、この未開な地に多くの人口を集め、更に100以上のヨーロッパの交易都市との間に経済的なネットワークを結成することができた要因は何であったのだろうか。先ずその位置と自然環境の有利性を検討しなければなら

い。

リューベックはホルシュタイン地峡に位置し、ライン地域とプロシア地域との中間にあった<sup>17)</sup>。ここは西方からの移民を集め、東方を拓くための適当な地理的位置にあった。北海に注いでいるトラヴェ川は、河口に突出したPriwallの砂洲によって細い地峡を形成しているが、そこをさかのぼると河幅が広がる。更にヘレンヴィクとシェルトップとの間の川幅の狭い地点をさかのぼり、河口から約20kmの地点でトラヴェ川がヴァケニッツ川を併せる地点に達する。この二つの川の合流するところに形成された中州そのものがリューベックの都市の建設の場として選定された。二つの川は中州をとりまき、自然の流れは都市防禦に好都合であった。リューベックは既に述べたように、典型的な建設都市であり、当初から自治的な都市法によって自律が与えられていた。新しい開拓地であったために、自由都市の成長を寛大なものにするような環境があった。しかし、その代償として、都市の自衛のためには多くの税金を費やさねばならなかった。それは14世紀に入ってから、領主間、都市間の係争があり、海賊や陸からの盗賊などによる絶え間のない危険があったからである。簡単な柵によって地域を画定して、都市とその外縁地域を明瞭にすることからはじまり、堅固な石の囲壁が施されるようになった。リューベックが自然の河流のほか、更に囲壁をめぐらし、海洋に出る為の港と流路を確保したことは、ハンザの主要都市として発展する為の極めて有利な条件となっている。

次に北方交易で要求された塩は、この地から約120km南に位置するニーダーザクセンのリュネブルク(Lüneburg)<sup>18)</sup>が膨大な岩塩を貯えており、この塩を運ぶ陸路は、比較的低平で塩の輸送にも好都合であり、多くの抵抗なしにそれを手に入れることが出来た。またリューベックが確保した北方産の魚類、木材、石材、鉱物、毛皮などの輸送路は、比較的急速に各地にひろげられた。リュネブルクの塩は、リューベックの独占的な市場に組み入れられ、スカンジナビア南部のスコーネ<sup>19)</sup>で塩蔵魚の基地を築くことが出来た。港と塩との結合は極めて有利な条件となった。

またハンザの都市として、リューベックと友好性の強いハンブルクへの距離は僅かに70km、この

地の主要な生産であるビールは、ノルウェーやスウェーデンなどの人々の需要度の高い品であった。少なくとも16世紀初頭まではハンブルクは、リューベックに従属できたハンザ都市であった。

## 2. リューベックの都市機能配置

リューベックは、人口22.5万人(1985年)、面積222.4㎢の小規模な都市である。既に述べたように、第二次大戦による大爆撃の後、市の工業化、近代化よりも、中世の歴史的宝庫そのものの建造物の復旧と保存、考古学的研究と並行して地理的景観の保全に全力を注いだ都市である。したがって現在の都市の主要機能の立地状況を見ることによって、中世ハンザ都市リューベックの特殊性を十分に観察することが出来る。ここでは歴史的な地図や、その他の資料と筆者の見学の結果を併せて、中世ハンザ都市リューベックの機能配置を観察することにする。

### 1) 囲壁・門

リューベックは二つの流れが自然の防禦地形をつくり、しかも外への重要な交通路をなしていたが、12世紀頃には、更にその川に沿って石の囲壁がつくられている。

11世紀に入ると司教座のある町では、たいていそれまでの木の柵で囲まれたものを石造の囲壁に変化させている。大司教座がおかれたフランスのアヴィニヨンの城壁は、12～14世紀に建てられたもので城砦のような偉容がある。ドイツではハンブルク、ネルトリンゲン、ニュールンベルク、ミュンヘンと、大小の都市のいずれをとっても中世期に発達した都市には、頑丈な囲壁があったのが一般である。囲壁は、防禦の目的が本来的なものであるが、更に都市と村落とを明瞭に画定し、その内部に特権を与えられた市民が共同体を構成し、同じ都市法に従っていることを表現するものでもあった。

リューベックの囲壁は、13世紀に建てはじめられ、4つの門が設けられるようになった。それは強力なデンマークの支配から自由となったシンボルともいい得るものであった。<sup>21)</sup>

囲壁の中に配置された門のうち、西の入口ホルステントール(The Holstentor)は、その美観で知られる。この位置は西から都市中心部に接近するよい位置にあり、丘のふもとの部分に当たる。

この門は1469年から78年に建造されている二つの塔から成り、その間に中世の家の様式を持つ建物がある。門の内側アーチに市民のモットーがラテン語で示されている。「CONCORDIA DOMI FORIS PAX」とあるが、「内に調和を 外に平和」の意である。

これと対応する北の入口にブルグトール(Burgtor)がある。川をさかのぼる船がこの町に接近する際の第1関門である。そこには、1230年の町の防禦壘そのものが現在もよく保存されている。この建物の右側には、1571年建立の税関の建物が保存されている。貨幣の流通や海航のルールが確立されていない時代に、仲継貿易の要となったリューベックの税関は、ハンザ貿易で重要な役割を果たした機能といわなければならない。リューベックの1824年の地図を見ると、川に沿って囲壁と壘の形態がよく保存されているのを見出すことが出来るが、現在では原型が失われている部分が多い。

### 2) 街路と古いマーケット

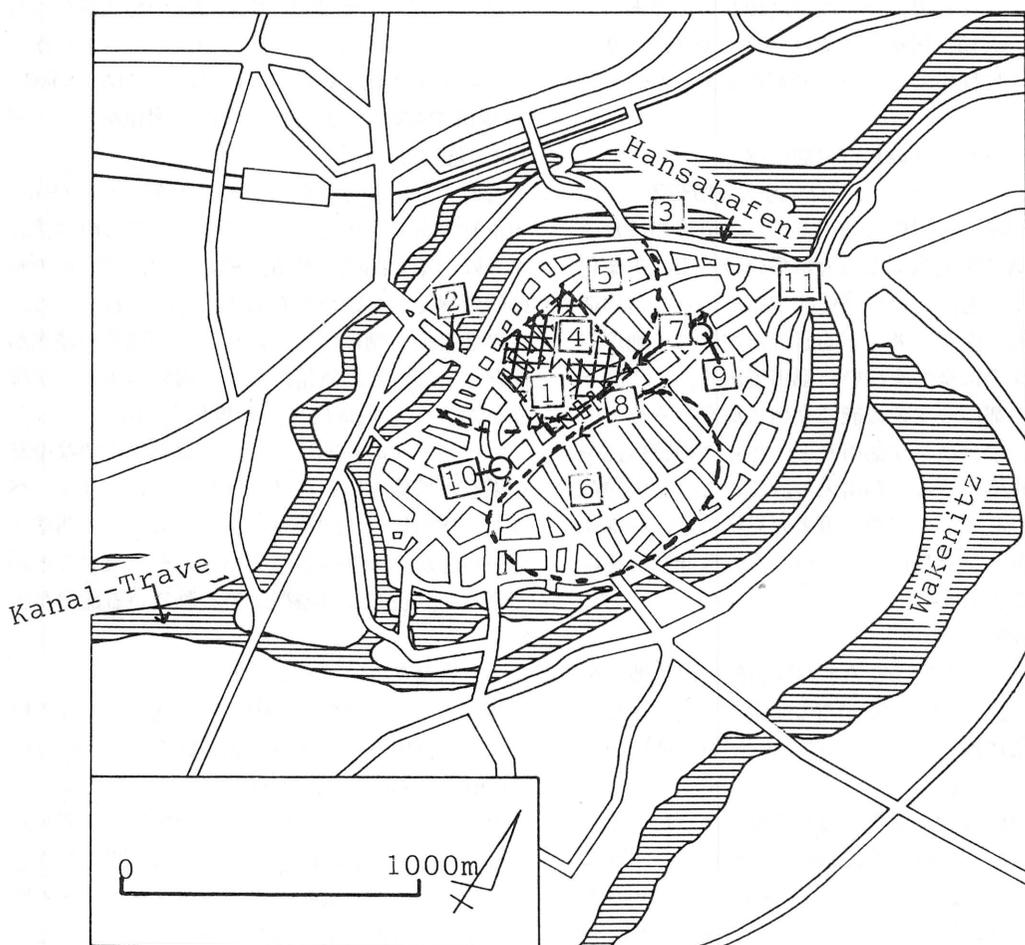
リューベックの街路の中で最も基本となっているのは、楕円型の市域を南北に貫く二本の通りのBreite StrasseとKonigstrasseである。この二つの街路は北と南とでそれぞれ合流し、北でKoberg、南でKlingenbergとよばれる空間を形成している。前者は自国産の生産物のマーケットの場であり、南のは重要な塩のマーケットであった。

この二つのマーケットは、それぞれ市の北半と南半の中央部にあり、市の初期の商業の中心部として重要な拠点とみられる。この二つのマーケットから、北はBurgstrasseを経て主要な門のBurgtorへ、南はMuhlenstrasseを経てそれぞれ河にかけられた橋を渡り、外部に通じている。この二条の中央道をはさみ、これと並行して東側に三条の主要道、西側にも三条の主要道が走り、それらはいずれも川岸に位置する門に導かれ、川を渡って外縁部に通じている。

以上の南北の大きい道路を横切る東西方向の街路は一般的に連結の役割を持ち、道路に沿って民家が発達している。

塩のマーケットのKlingenbergの西には聖ベトリ寺院があり、更にこの町の主要な玄関となるホルステントールの門を経て、河港に達しているが、後に述べる塩の倉庫は、この門に接続して立地し

図1 リューベックの都市機能配置



- |   |                             |
|---|-----------------------------|
| 1 Rathaus   | 7 Breite Str.               |
| 2 Holstentor  | 8 König Str.                |
| 3 港湾施設  | 9 koberg (古い国産物マーケット)○      |
| 4 核心地区     | 10 klingenberg (古い塩のマーケット)○ |
| 5 商人の住区    | 11 Burgtor                  |
| 6 手工業者の住区  |                             |

原図は(1980年)

ている。

### 3) 核心地区の中心機能

現代の都市の核心部のCBDといわれるところは、一般的に行政機能、中心的商業機能、公共的機能など都市全体を支配するような中心機能が集積する。その中で、広場は公共的機能として極め

て大きい役割を果している。その広場に面して、市の中心的なマーケットや、行政・司法などの機能が集積し、従属する地域にサービスを行っている。R. E. デッキンソンは、「都市的中心には三つのセットの力が影響を与えている。」<sup>22)</sup>といい、その力は市場原理・交通原理・行政原理であると

説明している。

中世のリューベックの核心地におけるこの三つの力は、都市全体のみならず、更にヨーロッパ広域の諸都市にも大きな支配力を持ち、その影響圏にサービスの供給を行ってきた。

#### ① 広場と中心マーケット

リューベックの広場は、主要な門のホルステントールをくぐった先の、やや小高い地形に位置している。広場に面して市の経済の要であるマーケットがあり、市政とハンザ貿易の支配力の焦点となるラートハウス(Rathaus)、商人教会のマリア教会とが立地している。

この広場の位置は、市域全体からすれば、市の南北軸の中心部に、東西軸の中心部よりやや西に偏している。広場はトラヴェ川の流れの内側に設けられた港と、その港湾にそった塩などの倉庫群へのアクセスのよい位置にある。マーケット広場と港湾施設、倉庫との関連性は全く偶然なものではない。

1824年の地図を見ると、この港湾と広場及び倉庫の多い河岸地域を護る囲壁は、港のある西側で特に堅固につくられていることが解る。

#### ② ラートハウス(Rathaus)<sup>23)</sup>

ゲルマン社会では、市の行政をラートハウスとよんでいる。ドイツの歴史的都市を訪れる人は、各市毎のラートハウスが極めて個性的であり、その建造物が町の象徴となっていることに気付くであろう。建築の素材や様式は、市民の力の結晶であり、機能が充分であるだけでなく、文化的価値が高いものが多い。リューベックでもこの一般的なパターンと異なることはない。

ラートハウスは、リューベックの心臓部、広場に面して立地している。北につづくマリア教会及び教会の庭、南はマーケットが配置されて、この三つが相互に補完し合って全市の活動の原動力となってきた。

ラートハウスの最も古い部分は、1230年頃のもの、市が帝国都市となって直後の建物で、様式は初期ゴシック風である。南の壁はマーケットに面して、美しいアーケードを伴っており、大きい風穴や装飾の施された背後の壁面には美しい塔があり、そこには最も古い建造物がある。注目すべきことは、その素材に一部分、ゴートランドの石材が用いられることである。既に述べたようにゴ-

ートランドは、リューベックからの渡航商人が前ハンザ時代に渡航し、更にロシアへの交易の道を開いていた島である。そのゴートランドの石材は、ハンザ交易品として重要なものであり、この市の市庁舎の一部にも導入されたことが確かめられる。

アーケードの下には、ラートハウスのワインセラーの入口が設けられている。どのラートハウスにも、たいていワインセラーが地下に設けられているが、そこは市民の談合の場であった。(現在はパブリックなレストランになっている。)

ハンザ員の居留したベルゲンの中心部のワインセラーも、ハンザ員とノルウェー人の常設的な談合の場に用いられていた。その他、「会見の場」「ハンザ・ホール」なども設けられた。後者は19世紀にはその機能が失われている。

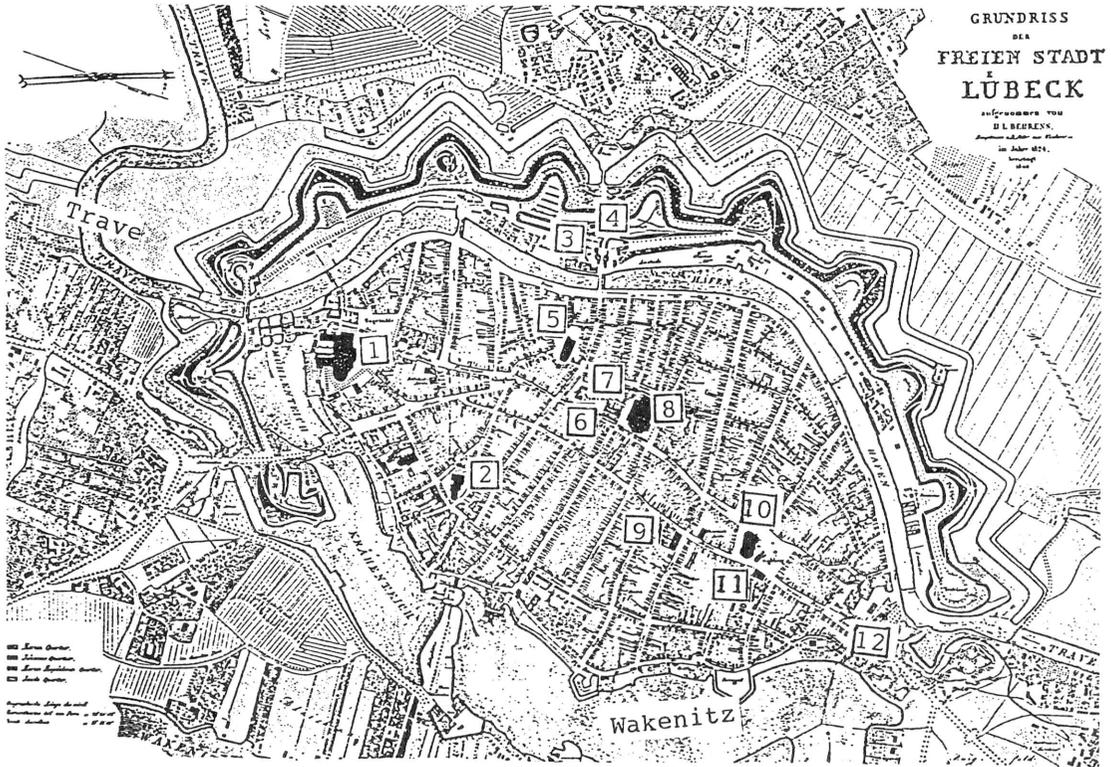
13世紀後半から14世紀のものと考えられている「Danzelhaus」は、宴会用に用いられた部通である。新しい建物への入口につくられたダッチルネッサンス風の装飾的階段は、16世紀末のもので今日までよく保存されている。

ラートハウスで行政を施行したのはラート(Rat)といわれる複数の参事会員であった。この制度はリューベックでは、12世紀の終りから13世紀初め頃に確立されたといわれている<sup>24)</sup>。その員数は時期により異なるが、20~30人程度であった。この制度はヨーロッパの南の方ではじまり、アルプスの北へと影響を与えたといわれ、ラート員の資格は都市によって異なっていたようである。

リューベックの場合は、市に住む自由民で商人に限られ、更に門閥であることが強調された。ハンザの出先機関のハンザ員で責任者の地位をもつ者の中にも、この資格を得たものもあった。リューベックの市参事会には、二つの業務の構造があった。ひとつは市の内政に関する機構であり、他のひとつはハンザ貿易に関する業務機構であった。盟主都市であるリューベックの参事会は、外に対して、リューベックを代表する権威をもっていた。しかしハンザに関する業務内容は、現在の国家群の形成する共同体の本部のような組織はなかったようである。<sup>25)</sup>

参事会は、ドイツ商人団体の渡航したゴートランド島ヴスビーでも、13世紀にヴスビー人と共にこの自治行政組織をもち、また、練の産地スコー

図2 1824年のリューベック



- |                   |                     |                            |
|-------------------|---------------------|----------------------------|
| 1 Dom             | 6 Markt             | 10 Jakobi-Kirche           |
| 2 Aegidien-Kirche | 7 Rathaus           | 11 Heiligen-Geist-Hospital |
| 3 Salzspeicher    | 8 Marien-Kirche     | 12 Burgtor                 |
| 4 Holstentor      | 9 Katharinen-Kirche |                            |
| 5 Petri-Kirche    |                     |                            |

ネでも同じパターンのもので生まれた。ベルゲンでも同様であった。リューベックを経て、自治行政組織がそれぞれの地域の経済活動に於て、統一性と集心性を高めた。<sup>26)</sup>

### ③ 核心地区の教会

広場にあるラートハウスの北に接して、マリア教会が立地している。ラートハウスと教会、マーケットとの近接と機能の一体性は、ハンザ都市リューベックの特殊な都市機能と時代的背景を反映したものである。

最初の教会は1200年頃、ロマネスク、バジリカの木造の礼拝堂であった。13世紀の半ばの大火の後、新ゴシック様式に建て替えられ、その後時代毎に建物の内部、装飾に変化がおり、14世紀には現在の体裁を整えた。

この教会は、当初は司教の権威の下にあった。しかし、リューベックは他の建設都市と同様に領主や司教座の支配に屈せず、自らの自治独立を護

り、市民の自由が確立された都市である。ハンザの貿易が進展するとともに、マリア教会は有力なハンザ商人の礼拝所として、独立した教会の地位を確立するようになった。商人たちはこの建物を献呈し、更にその建物は宗教的儀礼にとどまらず、商人の書類の保管所であり、市政さえもここでおこなうようになった。

「教会を通じてでなければ救いはあり得ない」とするカトリックの信条は当然のことながら、この時代の背景として王や領主の都市における権威は小さく、教会が都市及び商人の最も重要な拠りどころであった。<sup>27)</sup> 即ち、教会の建物は市庁舎と同様の機能をもつ「商人教会」そのものであった。

この現象は、他のハンザ都市のいくつかの事例を見ることによって、一層明らかになるであろう。最北のハンザ都市のロシアのノヴゴロドでは、ハンザ商人たちの活躍の中心は聖ピーター寺院であった。この寺院には、交易に必要な書類とか、商

人の必要とする計量器などの外、財貨まで保管されていた。寒冷の地に赴く商人の保護は教会がおこない、更に商人の使う馬の牧草地なども、この寺院の属領地に確保されていた。

13世紀に、ノヴゴロドと最も直接的な交易関係のあったゴートランドのヴィスビー<sup>29)</sup>には、リュウベックと同名のマリア教会がある。この寺院は、島最大の規模で、当時の聖職者はドイツ人であり、ドイツ人の渡航者のうち、長期滞在をする商人によって献呈された。ノヴゴロドと同様に、商業上の書類や財宝の保護をマリア教会がおこなっていた。

在ノルウェーのドイツ人ハンザ員の教会、マリア教会も同様であり、ドイツ人聖職者がドイツ語による説教をおこない、ハンザ駐在員のペアリッシュ教会としての性格を貫いた。

いずれも、リュウベックの商人教会のマリア教会のパターンをそのまま継承しているものであった。市の行政とハンザ交易の経済の中核機能が一体となっている商人教会の存在は、中世の東及び北ヨーロッパの特殊性であり、その原型となったリュウベック、マリア教会の空間的中心性は極めて重要である。

#### 4) 港

建築物はよく保存されているのに対し、港湾施設は現在の工業の発達と共にその機能を変化させている為、中世の港湾の施設を検討するのは困難である。当時は河岸に多くの波止場が設けられていたことが想像される。そこには樽入りの魚類を引き上げるクレーンのような施設、入港する船へのシグナルなどが設けられていたと考えられる。

1824年の地図では、市の西側のトラヴェ川岸に港湾機能が集積していたと見られる。塩の倉(Salzspeicher)は、市の西の川に向けて立地するホルステントールに接して立地している。この倉は、リュウネブルクの塩をここに貯蔵し、スカンジナビア諸国に輸送したものである。現在残っているものは17世紀の遺構である。

ハンザ貿易の初期には、船の規模は小さく、大型の貨物輸送に困難が伴った。船幅が広く、多量の荷重が可能で、しかも比較的速度の早いCog<sup>30)</sup>とよばれるマストが1本で、帆の面積の大きい船が用いられるようになり、北海、バルト海、イギリスからスカンジナビアまで広く用いられる

ようになった。この船の建造は、ハンザリーグの港で約1,300艘も建造されたものであった。港にはこの船が出入りしていたことは確実である。

#### 5) 教会の立地と秩序

リュウベックの教会の多くは、ほぼ13世紀頃に建てられているもの、あるいは、その教会に関する文書が13世紀頃にさかのぼることが出来るものが多い。13世紀はリュウベックが、ハンザ貿易で指導力を発揮する以前の時代に当るが、既にここからバルト海やロシアなど北方に、商人の団体を送っていた時代である。北方の交易の開発のほかに、リュウベックの商人は東方のスラヴ民族の町々や、ヴァイキングの習慣の残る地域に対するキリスト教の布教にも、力を入れていた。従って、13世紀以前にリュウベックには、キリスト教会が設立されていたことは確かであろう。

教会は、市民の精神的な拠りどころであると同時に市民の自治や自由の保護者であり、文化の推進の主体でもあった。リュウベックには司教座の置かれたドーム(Dom)、市の核心部に位置するマリア教会(Marien-Kirche)、その南に位置する小規模ながら美しい聖ペトリ教会(Petri-Kirche)中心の街路の北寄りに立地する聖カタリン教会(Katharinen-Kirche)、聖ヤコビー教会(Jakobi-Kirche)、中心部より東の民家の間に立地するイーギディエン教会(Aegidien-Kirche)などの教会が立地している。

これらの教会は偶発的に、適度の間隔をとって任意に立地しているように見えるが、それぞれの教会の特質、立地の際の役割などを見ると、教会の立地分布には、この都市の機能に応じた、ある空間的秩序があることが解る。

① ドーム(カテドラル)は大聖堂といい、キリスト教の宣教の地域の中核であった。中世初期から王権と結合したキリスト教圏の拡大がすすみ、各地に司教座が置かれるようになった。ドームの座の全体的な配置については、都市との結び付きがよく考慮されていたし、そこに定住する司教が都市の発展に寄与したことは、領主や王の力よりも大きいといわれている。リュウベックのドームの建設は、1173年にはじまっている。リュウベックの都市建設は、之より14年以前であるから、早い時期に、ドームが市の教会の重心的な役割をもったといえよう。ドームが市の南に位置したのは、

交易機能からも距離があり、船の入る最初の関門のブルクトールからも最も遠い位置にあることが、防禦の上からも結果的に秀れた位置であった。

中世の司教座の置かれた都市の多くで、ドームが最も大きい権力をもつのが一般であったが、リューベックの場合は、市の核心地に威容を誇るマリア教会の権威が最大であった。商人教会のマリア教会のような例は、バルト海域のハンザ諸都市に見られた現象である。

② マリア教会は、その意味に於いて、商人の擁立にかかる典型的な教会で、リューベックのみならずドイツ人の渡航したハンザ諸都市・各地域の在留ドイツ人教会との連繋が強く、そこでの聖職者達もまた、ドイツ人の中から商人によって選ばれていた。マリア教会は、ラートハウスと接し、市政やハンザの業務とも強い関連性のある教会であった。

③ 聖ペトリ教会は、既に1170年、木造の礼拝堂をもっており、地域の人々により1240年にはロマネスク様式の斬新な建築に変わった。この教会の中には二階に集会所があり、地域の人々によって集会所が持たれた。この建築の様式が、北ドイツの町の教会にも影響を与えたのは、リューベックの文化の勢力圏を反映している。

④ 聖カタリーン教会は、この町唯一の修道院教会である。フランシスコ教会に属し、聖職者が他からもここに定住し、中世の時代を通じて宗教の布教とともに、教育や文化の拠点となった。

⑤ 聖ヤコビー教会が、最初の記録にあらわれたのは、1227年であった。船主やハンザ船員の交易の実務に当る人々によって献呈され、礼拝した教会である。港湾都市にはこのような教会が置かれている例は多い。海難が多かった時代のハンザの船主にとって重要な教会であった。

⑥ イーギディエン教会は、都市の生産を担うクラフツマンたちの居住区に立地する教会である。中世に於いては、同職仲間の組織のギルドや、ツンフト<sup>31)</sup>があり、リューベックの手工業者達は、市の南北道から東部に集中居住していた。

この現象は、リューベック商人が渡航し、北方産の物資の交易のため長期滞在を行い、そこにドイツ人の居住区を形成したノルウェーのベルゲンにも明瞭に見られる。そこではハンザ商人の教会のマリア教会は、貿易機能地域の背後にあり、手

工業者達はそれとは別に湾の奥の背後にあるハルヴァルス教会を礼拝の場としていた。

以上のような教会の設計や装飾などに、ウエストフェリアの技術者、フランスからの芸術家も参加し、用材はリューベックの特産の煉瓦を主体として、一部ゴートランドの石材などもここに運ばれた。

## 6) その他の施設

### ① 慈善病院

市の参事会の活動の中で、1286年に開かれたHeiligen Geist Hospitalの設立は、際立った社会事業としてあげられる。教会をもつこの病院は、貧困な人々に提供された社会施設である。現在も教会本堂は、年老いた人々の為の住施設として用いられている。

西ドイツ、アウグスブルクの金融業で、一大富豪となったフッガー家一門がつくった「フッゲライ」<sup>32)</sup>という貧しい人々の為の住居施設は16世紀のはじめに開かれ、今日に至っている。リューベックのこの病院施設は、13世紀にさかのぼり、現存している点で特筆されるべきものであろう。

### ② 船員会館

その他の機能として、ハンザの交易に重要な役割を果たした船員達の為の慈善施設として16世紀に建てられた船員会館の Haus der Kaufmannschaft がある。

この集会所は船主の集会所にあてられたもので、中世のハンザ員の居留地にも、“Schutting” と呼ばれた同じ機能の建物があった。ベルゲンでは、その位置はドイツ人の商人の地区の中心部に位置していた。船主がここで自主的な談合を持ち、その施設が極めて充実していたことは、ハンザの商人の活動の秩序の連体性の一端を示すものである。

## 7) 二つの居住区

居住区は単純ではあるが、配置に秩序が存在していた。

中心部を走る南北の二つの主要道から西側には、比較的商人のエリートが集中していた。それは中心広場やラートハウスのような中心機能が港や倉庫に足掛かりのよいところに選定され立地したものである。商人の家は、初期には入り口の幅8m、奥行き30mのプロットに道路に沿って割り当てられていた。

中世からの美しい切妻をもつ商人の家並みは、

マリア教会に通じる東西の主要道の Mengstrasse と Grosse Petersgrube の西側、マリア教会の東に当たる Königstrasse の通りなどが中心である。

中部の南北主要道より東の街路の内部には、手工業者や商人の家もあった。そこには街路の名に Fleischhauerstrasse (肉屋の通り)、Glockengiesserstrasse (鋳物師の通り)、Spinneradamchergang (糸紡ぎ用車の製造工の小路)、Garbereitergang (皮なめし人の小路)、Bakkergang (パン製造人の通り) などを見出す事が出来る。之等の地区の中心に手工業者の地区教会がある。

15～16世紀には、人口が増加し、家並みの背後の細い通りにも民家を増やさねばならなくなった。先ず第1には、商人や労働者達の為の貸家、次いで寡婦達の為の救済の家が優先した。通りの交叉するところには内庭が設計され、そこは近隣の人々の憩いの場となり、木陰がつけられていた。

商人と手工業者との居住分化がおこっていたのは、ハンザ都市に共通であり、殊に沿岸諸都市で商人的要素が優越していた。リューベックでは商人の門閥が総て優位であったが、その影響は、ベルゲンの商館地域の機能配置にも、また商人達の居住空間の利用にさえ、色濃く反映していた。

## む す び

リューベックの中世の都市機能配置を考察した結果は、次のように要約される。

リューベックは、中世ヨーロッパ東方の未開地に、領主の主導により創設された「建設都市」である。初期には、他の地域からの移民を導入し、建設を推進した。自由市民による自治行政組織は、市の中心核で成立した。

都市発生の後、中世のドイツでも一般的であった囲壁がつくられ、都市域と、その外縁の農村地域は明確に画定され、囲壁の内部は、自由市民による商業と、居住の空間となった。19世紀の地図を観察してみると、囲壁の外への市街地化進行は停滞している。この現象から、ハンザ貿易衰退後は、都市の活力が低下していることを示すものと考えられる。

機能の配置は、すべて貿易業務に適応するように整備された。初期の街路の配置は、二つのマーケット広場、中心の主要なマーケット広場を重視し、北の関門に税関、西側の河岸の港湾施設が、

地形を見事に利用して配置されている。市は防禦都市の形態を備えている。

都市機能の中心核は、中心広場を中心として、ラートハウス・商人教会・中心マーケットの三機能を結合させている。商業都市の自治は門閥の商人の手に委ねられ、中世に出現した商人教会は、行政と結合するとともに、ハンザ商人の精神的なよりどころでもあった。

地域に分布する多くの教会の立地分布の様相と各教会の役割を見ると、一定の秩序が見出される。司教座教会のドーム、商人教会のマリア教会は、距離をおいて配置され、ハンザ商人の礼拝所の商人教会が中心核にある。この点で司教都市一般とリューベックとは、著しく異なったパターンをなしている。その他の教会は、修道院・慈善、救済を主眼とする病院をもつ教会・船主教会・手工業者達の地域教会などが、それぞれの立地地域の中心となっている。教会は市民や交易活動の保護者であり、大学のなかったこの町では、文化と社会救済活動の役割をもっていた。

港は西側の河岸に中心があり、塩やその他の倉庫は河岸に集中立地している。港の機能地区の門は、西側のホルステントールが市の経済活動の象徴となっている。

住宅地域は大きく二分される。中心より西部に市の中心核があり、それをとりまいて商人の邸が分布した。それに対して、手工業者の住宅は中心より東に分布した。手工業者の礼拝した教会の周辺は、彼等の居住地区でもある。街路に、手工業者の居住したことを示すような名が残されている。

リューベックは、ハンザ諸都市との交易を通じ、北方のドイツ人居留地の構造にも強い影響を与えている。ベルゲンにおけるハンザ員の貿易機能地域は、リューベックの都市の機能配置の秩序を踏習している。また、リューベックからの渡航者の多かったゴートランドのヴィスビーの都市構造にもリューベックの影響が顕在している。いずれも、貿易業務機能と行政機能・商人教会の三つが中心部で一体となり、求心性をもった。

## 注

- 1) 藤岡ひろ子 (1979) : 外国人居留地の都市構造 — 神戸と横浜の比較研究 甲南女子高研究紀要 1

- pp. 17-44.
- 2) a 藤岡ひろ子 (1981) : 都心形成との関連からみた神戸市の商社立地変動 地理学評論54 pp. 34-45.  
b 藤岡ひろ子 (1983) : 神戸の中心市街地 大明堂 pp. 34-47.
  - 3) 藤岡ひろ子 (1984) : 港湾都市の「貿易業務地区」—長崎の事例研究—甲南女子高研究紀要7 pp. 1-30.
  - 4) b注2) pp. 195-213.
  - 5) a 藤岡ひろ子 (1985) : リバプール中心市街地の変容 お茶の水地理26 pp. 1-9.  
b 藤岡ひろ子 (1989) : リバプールの都市化現象と地帯分化—19世紀~20世紀初め 兵庫地理34 pp. 34-45.
  - 6) 藤岡ひろ子 (1989) : 中世ヴィスビーとベルゲンのドイツ人居留地 歴史地理学146 pp. 1-19.
  - 7) Beaujeu-Garnier, J. & Chabot, G 木内信蔵・谷岡武雄訳 (1971) : 都市地理学 鹿島出版会 P. 180
  - 8) 増田四郎 (1987) : ヨーロッパ中世の社会史 岩波書店 岩波セミナーブックス13 pp. 170-173.
  - 9) この現象を「遠隔地商人の市場定住」という。増田四郎 (1982) : 西ヨーロッパの中世都市「中世の都市」学生社 中世史講座3 P. 109
  - 10) 高橋 理 (1980) : ハンザ同盟—中世の都市と商人たち— 教育社 pp. 39-43.
  - 11) 注10) に全じ
  - 12) Barley, M. W. ed. (1977) : European Towns. Their Archaeology and Early History. Academic Press. pp. 142-144.
  - 13) Ennen, E. 著, 佐々木克己訳 (1987) : ヨーロッパの中世都市 岩波書店 P. 215
  - 14) ハインリッヒ獅子王による特権状は, 平和条約・通商条約・商人に対する特権という三種の性格をもっている。注10) pp. 56-57.
  - 15) Dollinger, P. (1971) : The German Hanza. (Ault, D. C. and Steinberg, S. H. (tr. & ed) ) Stanford University Press. pp. 117.
  - 16) 注10) P. 49
  - 17) 注15) P. 117
  - 18) 注15) P. 118
  - 19) 注15) pp. 239-241.
  - 20) 注15) pp. 117-118.
  - 21) Enn, A. B. (1981) : Lubeck. Hansisches Verlagkontor H. Scheffler P. 14
  - 22) Dickinson, R. E. 著, 木内信蔵・矢崎武夫訳 (1974) 「都市と広域」 鹿島新出版会 P. 57
  - 23) 注21) P. 36-44
  - 24) 注13) P. 165
  - 25) 注10) P. 150
  - 26) 注13) P. 167
  - 27) 高橋 理 (1989) : 中世初期における北・東ヨーロッパの宣教事情 弘前大学教養部「文化紀要」30号 pp. 1-83.
  - 28) 注13) P. 228
  - 29) Soderberg, B. G. (不明) : A Journey Through the Centuries. Gotlandskonst pp. 107-109.
  - 30) Angelucci, E. & Cucari, A. : ships (1977 Macdonald & Jane's Publisher Ltd, pp. 38-52.
  - 31) 注9) P. 123
  - 32) 諸田 実 (1989) : フッガー家の遺産 有斐閣 P. 302

#### 参考資料

矢守一彦 (1970) : 都市史における広場 — とくにドイツについて — 「生産の歴史地理」歴史地理学会編 古今書院 pp. 257-292.

(ふじおか ひろこ 立命館大・非)